慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』（巻三）解題・翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.49 (2009. 6) ,p.47- 64
JaLC DOI	10.14991/002.20090600-0047
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20090600-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』（巻三）解題・翻刻

辻　英子

本原稿は『三田国文』第四十八号に掲載した（巻二）を承ける翻刻である。

バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』（巻三）詞書

源氏目録巻之三

十六　乙女　十七　玉鬘

玉かつらのならひ　はつね　同　ほたる　同　かゝり火　同　みゆき　同　まきはしら

玉かつらのならひ　こてふ　同　とこなつ　同　野わき　同　ふちはかま　同　十八　梅かえ

十九　藤のうら葉（1オ）

（遊び紙）（1ウ）

十六　乙女

此巻乙女といふ事賀茂の臨時のまつりといふ事を大内にてつとめさせ給ふ時分は十一月なり二十よりうちの女房をそろへて天人のすかたにいたしたてゝ舞姫とて大内殿へ下一人なとのかたより参らせらるけんしつとめ給ふとし御めのとのこれみつかむすめを出し立てまいらせ給ふにしのひてのそきて御らんすれはむかし源氏のわかくおはせしおり参りしをとめ（2オ）をしのひおほしめしていまた忘れかたくおほしめす人ありそれをおほしめし出てそれもいまは年ふりぬらん我も年ふりぬとおほしめしてよみたまふ哥

をとめこか神さひぬらしあまつ袖
ふるきよのともよはひへぬれは㊼

とよみ給ひしゆへに乙女といふなり返事

かけていへはけふのことゝそおもほゆる
日かけの霜の袖にとけしも㊽
扨これみつかむすめは其まゝ大内にとうの（2ウ）
内侍のすけとてさふらはせらるゝ是そけん
しの御子あふひの上の御腹のわか君のち
には夕きりの大しやうと聞えさせ給ふか
此巻よりときく見なれ給ふあまたの
御子ともうみ奉りし人なり此ことは
乙女神の神楽の義なれはいかにも神祇を付
へし又此巻に夕きりの大しやう十二に
て元服そのころよりおちの内大臣の御
むすめ十四はかりに成給ひしうはの大
宮のもとにおひたち給ふをおさなき御（3オ）
心にふかく心にかけてこひしのひ給ふひめ
君しつ心なきもろこひなり御父きゝつけ
給ひてあやなくひきのけて姫君をはわ
かもとへしのひやかによひとり給ふ此姫
君御心くるしくおほしてある夜のねさ
めに雲井のかりの我ことやとしのひ
やかになかめしをかの夕きり立きゝて
いとゝおもひのまさりしなりつゐに藤
のうらはの巻におとゝ御心ゆきてむこに
とり給ひてめてたかりしその御ことは（3ウ）
雲井のかり　ねさめ
もろこひ

おさなき程の御心つくしいとこなといふ事
つくへし又此人々の事に六位すくせと
いふ事の侍りしなに事そとおもふへから
す此人々あるときいかなるひまにか一と
ころにて物かたりし給ふを此雲井の鴈
のめのと腹たちて夕きりの其比はいまた
六位にておはしける程に此姫君をはとう
くうへまいり給はんとかし付き給ふなれは（4オ）
なそやまたしきに六位すくせとはらた
ちしなり是はことによりて付へし
是等は　いかにも成あかりて見えたき心ねをすへし返々夕きりの大
しやうの北のかたをは雲井のかりと心えへし
夕きりに付んもにつかはしく有へし其
ころは秋なり又此巻に源氏のおとゝ六
条京極あたりに四町をしめて殿つく
りして　旁の女房たち渡し聞え給ふ
此とのに心々のこのみ庭をつくりしな
りまつ南のひかしにはむらさきの上（4ウ）
の御かた春のあけほのをしめ給ふ春の
くさ木とも数をつくしてうへらるゝさ
てこそ春の御かたとも申けれ東の町に
は花ちる里と聞えしは夏の御かたにて
うの花さうひくたにふちつゝしなと
植たまひたりこれは南おもてなり花
ちる里によそへておもしろく梅つほの

女御と申六条の宮す所の御むすめけん
しの御やしなひの御むすめなれはにし
ひつしさるの町にすみ給ふこれは内より（5オ）
出給ふ御さとの為なり此女御の君秋の夕
しめ給へは秋の野をはるかにうつし極て
木たかき紅葉の宮をましへことにおもし
ろし其比のおりに此きみ秋をこのむ中
宮冷泉院のきさき共いふいときよらをま
したり北いぬいのかたには明石の御かた
大井におはしましゝかうつろはせ給ふ
北是は冬のけしきをうつして冬枯の
野へのけしき五葉の松雪のあしたはま
ことにすたれもあけぬへしことにすこく（5ウ）
おもしろしか様の事よく〳〵れうけんし
て付へし去ほとにかた〳〵とのうつりめ
てたくして秋このむ女御の御かたその
ころおりにあひたれはことにおもしろ
きにかの女御の御かたよりもみちを箱
のふたに入てうへわらはのいとものつけ
きようなるを御つかひにてむらさき
の上の御かたの春の御かたへ御哥有

秋このむ中くう

こゝろから春まつそのはわかやとの
もみちを風のつてにたに見よ㊾（6オ）

とよみてをくられたり御返りは此はこの
ふたにこけしきいはなとの心はへして
五葉のえたに

風にちる紅葉はかろし春の色を
いはねの松にかけてこそ見め㊿

と云事も有へし其次の春又むらさき
の上の御かたよりかの女御秋の御かたへこ
その紅葉の御返事にこれもはなをいは
ねの松なとに取くして去年のこと
くわらはして御つかひ有（6ウ）

花そのゝこてふをさへやした草に
秋まつむしはうとく見るらん51

との給ひて送りたりしはいとおもし
ろき御心ともなりかやうの事はをとめ
巻に見えたる事なれはおなし所にか
きし雲井のかり又は乙女なとには付ま
しよく〳〵心えへし此花もみち殿うつ
りの庭のけしきなとは四季の心にて
あらんつらんとおほえ候（7オ）

〔絵一〕（7ウ）

十七　玉鬘（かつら）

此巻玉かつらといふ事箒木（はゝきゝ）の巻に物語せし
なてしこの事なりむらさきの上の御かた
に玉かつらの姫君のつくしよりのほりた
まひしを右近はせにてまいりあひて

源氏のおとゝに申たりしかはむかへとり
てもてなしかしつかせ給ふをむらさき
の上いかなるすちの御程にかとうたかひて
よみ給ひしなり
　こひわたる身はそれなれと玉かつら（8オ）
　いかなるすちをたつねきつらん㊷
とよみ給ひし故なり扨此玉かつらといふ
は夕かほの上にはかなくをくれ給ひし
こと年はふれとも忘れ給はすさまく
人を見給ふにもあへなくきえはてし露
のよすかの心にかゝり給ふにかたみに
つかひ給ふ右近はかりはさうくしく
かなしくていかにしてかかの物かたり
せしなてしこをたつね出さましとお
もひわたり給ふかかの姫君は御年四にて（8ウ）
めのとにつれられてつくしへ下り給ふ
やうくおとなひ給ふまゝに御かたちも
かたしけなくうつくしくおひたち給ふ
ほとにめのとあはれにいたはしくもて
なしかしつきたてまつりかひなくめ
のとのおとこ小弐命（せうにいのち）つきぬいふかひなく
かなしくてめのとはこくみたてま（ママ）
つる程にならひの国のしゆこ　と　いひよ
りてすてに日とりしてむこ入せんと
する是におち給ひてかなしみ給ふ程に（9オ）
めのとゝ二人してとかくかまへて京へのほ
らせたてまつる御とし二十三これをつ
くしのほりといふかの大夫のしやうけん
をひての舟をやたてんすらんとおち
てはや舟にて上せたてまつるなりこ
れをつくし上りのはや舟といふ其
ことは
　廿年　　はやふね
つくしのほりなといふ事を付へしかくて
のほりはせにて右近まいりあひけんし（9ウ）
のおとゝに申てむかへ侍りてをきたて
まつりてひけくろの大将の北の方にな
りうちの内侍のかみかけ給へは玉かつらの
内侍のかみとはかけるなり此人はせへ参
り給ふ事は京へ上りてしるかたなく
父おとゝにもいまた申さす又源氏の
おとゝもしり給はす水鳥のくかにあか
り巣（す）をはなれたる鳥のやうにそお
ほしめしかなしみけるかなしさのまゝ
神仏に御しるへたのみ給ひてまつはせへ（10オ）
かちにてまいりほとけに祈り申せは
かの右近はせにて参りあひたかひに
なのり給ふ其時の哥
　ふたもとのすきのたちとを尋すは
　ふる河のへに君を見ましや㊸

されはつくしのほりにはつせまいりくる
しからす付へし此姫君のおさなき名
はるりきみといふ紅梅のいといたくもん
うきたるにゑひそめの御こうちきいま
やう色のすくれたるとはむらさきのうへ（10ウ）
此御れうさくらのほそなかにつやゝか
なるかいねり取そへてひめ君の御れう
なめりあさはなたのかいふのもんをりさ
まなまめきたれとにほひやかならぬ
にいとこきかいねりくしては夏の御
かたくもりなく赤き山ふきの花のを
りものもほそなかはかの西のたいに
たてまつり給ふうへはみぬやうにて
おほしあはすうちのおとゝのはなやかに
あなきよけとは見えなからなまめかし（11オ）
く見えたるかたのましらぬにたる
なめりとけにをしはかるゝを色
には出し給はねとと(けんし)の見やり給へる
にたゝならすいて此かたちのよそへは
ゆるし色いまやうなる事ありこれは
けしからぬ秘(ひじ)事と申ならはしたりかと
りとはみつ色のすゝしなりかちやうの
ことくなれはかとりと云今やう色とは
こうはいをはる云なりゆるし色とは
いまのねりぬきこうはいの事なり（11ウ）
四季にしたかひて名をかへたり ね(ママ) ぬき
ゆるし色とはこうはいをこきくれなゐ
よりすこしうすけれとゆるすと云り
ねりぬきいみしくくわしよくありこ
れ又秘事と云
これはこきくれ
なゐの
事也（12オ）

〔絵二〕（12ウ）

初ね 玉かつらのならひ
此巻はつねという事は明石の上の哥に姫
君をむらさきの上の御こになし給ひて
おはしませは見たてまつる事もなくて
恋しくおもふに正月一日かの御かたへ文ま
いらせ給ふ時の哥に明石のうへ
とし月をまつにひかれてふる人に(64)
けふうくひすのはつねきかせよ
此哥本哥に
まつのうへになくうくひすのこゑをこそ（13オ）
はつねの日とはいふへかりけれ(65)
初音きかせよとよみてたてまつりし
ゆへ也五葉の枝に ひけこ わりこ なとゝ

云事付へし又此巻にはかためのいはひ
の餅かゝみの事有むらさきの上には
源氏見せたてまつらせ給ひしなりその
おりの御哥にけんし（但うすこほりの哥はとし月の哥よりまへにあり）
うす氷とけぬるいけのかゝみには
よにたくひなきかけそならへる56
とよませ給ひしなり此心なとを取あはせ（13ウ）
て初音のいはひ
なれは
付させ
たまふへ
し（14オ）

〔絵三〕（14ウ）

胡蝶（こてふ）　玉かつらのならひ

此巻こてふと云事はむかしは院の宮一の人
きさきなとも四季に御読経（きやう）とていか
めしき大法会有仁王経（ほうゑにんわうきやう）大般若経（たいはんにやきやう）ともい
へり秋このむ中宮は六条のゐんにて
をこなはせ給ふ其つゐてにむらさき
の上も佛に花たてまつり給ふとて中
宮の御かたへ花たてまつらせ給ふとりてふ
にわらはを八人かたちことに調させ給ひて
鳥にはしろかねの花かめにさくらをさ（15オ）
しててふにはこかねのかめに山ふきお
なしき花の一ふさいかめしうよになき
にほひをつくせりこてふ花そのへ参り
てゐるとあり乙女の巻に春まつそのゝ
御返事花そのゝこてふをさへやと申
をくり給ひしも此巻なれはこてふと云
扨此巻に舟あそひ二の舟をうかへて
御かくありて心ゆきはおもしろかりし事
は是は春なるへし（15ウ）

〔絵四〕（16オ）

ほたる　玉かつらのならひ

此巻ほたるといふことほたる兵部卿
なくこゑも聞えぬむしのおもひたに
人のけつにはきゆる物かは57
玉かつら哥に
こゑはせて身をのみこかすほたるこそ
いふよりまさるおもひなるらめ58
此心は玉かつらの君をむかへとりたてまつり
かしつき給ふほとに心とけ給ふきんたち
いとおほき中に源氏のおとゝ兵部卿のみや（16ウ）
此君をかきりなく御心にかけ給ひて五

月四日の夜しのひておはしたるにけんし
すき〳〵しくかの姫君の御かたちのすく
れておはしますを宮に見せたてま
つりていとゝ御心をつくさせ申さんとや
其夕つかたほたるをおほく取あつめてき
ちやうのかたひらにつゝみて光をさとみ
せてほのかに見せしなりかのかつらの
しんわうにこゝろをかけし女こそ月のひ
かりをまちかねてほたるを袖につゝみける（17オ）
なとゝいふかきためしによそへたり
かのかつらの親王と聞えし人は清和天皇
の第五の御子ひわの上手そかしこれを
きりつほのみかとに第五とかけり
ひわひきとありおもしろしこれはき
ちやうのすきかけの蛍あやめのしつく
ほたるのかけほのかに見しなといふ事
を付へし五月四日の
事なり（17ウ）

〔絵五〕（18オ）

雙夏（とこなつ）　玉かつらのならひ

此巻とこ夏と云事玉かつらの君のすま
せ給御かたをは西のたいと云り此御かた
の庭にはなてしこの色を調たるからの
も又やまとなてしこなともとゝのへ
植わたされたりかのあまよのものかたりに
ちゝおとゝ此姫君をなてしこともかたり
出しゝゆへにやおもしろし咲みたれてえ
ならすおもしろし源氏のおとゝをはし
めたてまつりてわかきんたちこの御かた（18ウ）
にすゝみて鮎（あゆ）いしふしをかも川かつら河
よりたてまつりたるを御前にてらし
まいらせたまふ此心も近き川にし河なとゝ
いふ事有へし季（き）は夏なりいかにもすゝ
しき所を付へしそのゆへ
なてしこと
いふ（19オ）

〔絵六〕（19ウ）

篝火（かゝりひ）　玉かつらのならひ

此巻かゝりひと云事けんし玉かつらを
御子にしてもてなし給ふといへともま
ことの御子ならねは御心のうちにはむかし
の御かたみにもみたてまつらはやなと
おほしめし入て夏のよの月なきころす
こしくもれるけしきに篝火をともし

て御琴なとを調させ給ふ其時の御哥
にけんし
かゝりひにたちそふこひのけふりこそ（20オ）
よにはたえせぬほのをなりけれ59
とよみし故なり御ことを枕にしてもろ
ともにそひふし給へり此心にかゝり火と
いふ
琴をまくら　ゆふやみ
こひのけふり　おきの初風
玉かつら
なとゝいふ事あるへし（20ウ）

〔絵七〕（21オ）

野わき　玉かつらのならひ
此巻野分といふ事此は八月に大風ふきて
物さはかしく所々のつゐちすいかき瓦（かわら）
なとふきちらしすさましくおそろし
かりし也そうして秋は風ふく物也源氏
のことはならねと秋のかせそゝめきて
ふくをは野分と云なりさて源氏の御
子夕きりの大将のいまた中将にておはし
ましゝころなれはかの雲井鴈とよみ
し御いとこのひめ君をふかく心にかけ（21ウ）
て風のまきれに御いもうとのあかしの
はらの姫君の御かたへまいり給ひてすゝ
りかみこひてかの雲井のかりへ御文つか
はすかるかやにつくかみの色むらさき
のうすやうなり心えへし其哥に
風さはきむら雲まよふゆふへにも
わするゝまなくわすられぬきみ60
野分といふ事あらは此哥のことはをも
とりそふへしかるかやむらさきのうすやう
こひしすゝりなといふ事あるへし扨野（22オ）
わきのあさけんし所々へ風のとふらひに
まいらせ給ひしなり中にもあかしの御
かたへおはしまして大かたの風のとふらひ
はかりにてつれなく帰り給ふを御らんし
をくりてさう〳〵しくおほして御
ことをほのかにかきならしてあかしの
御哥に
おほかたにおきのはすくる風のをとも
わか身ひとつにしむ心ちして61
とよみ給ひしおもしろき事共なりその（22ウ）
時のことは
野分のあした　風のとふらひ
萩の葉すくる風
なとゝ云事を付へし野分に村雨ふり

たる心得へし雨と云事有ともあし
くはあるへ
からす（23オ）

〔絵八〕（23ウ）

御幸　玉かつらのならひ
此巻みゆきと云事は此行幸は大原野の
行幸の事なりさて御幸といふ主上は
かの源氏の御しのひの御子れいせんゐんに
ておはしましき此は十二月なり大原野
へみゆきし給ひしれいせんゐん
　雪ふかきをしほの山にたつきしの
　ふるきあとをもけふはたつねよ㊷
源氏御返事
　をしほ山みゆきつもれる松はらも（24オ）
　けふはかりなるあとやなからん㊸
鷹かりなれはそのことは
　みゆき　きし　をしほ山
　ゆき　ふるきあと
なといふ事有へし源氏のおとゝは
　みゆきの
御
供
なり（24ウ）

〔絵九〕（25オ）

蘭（ふちはかま）　玉かつらのならひ
此巻ふちはかまといふ事夕霧の大将の
御哥に玉かつらの内侍のかみのいまたひ
けくろの御もとへうつり給はてにしの
たひにおはしましゝおりよみ給ひし
　おなし野の露にやぬるゝふちはかま
　あはれはかけよかことはかりも㊸
とよみ給ひし故なりふちはかまと云り
そのころ源氏のむかしの御こしうとあふ
ひの上の御あには摂政関白なりかの夕きり（25ウ）
には母かたのおちこくはんはくの御母宮は
桐つほのみかとの御妹（いもうと）源氏にも御おは夕
きりの御ためには御うはなり此玉かつら
の姫君にも御うはそかし此宮かくれ
させ給へは中将も此ひめ君も服（ふく）にてく
ろきころもをき給ふ其服すくして
はうちの内侍のかみに参り給ふへきに
うちより御つかひにかの中将をたてま
つり給ふにした心にはゆかしくおもはぬ
にもあらさりけれは内のおほせ事ちき（26オ）
にけいし侍らんといひなして蘭の花の

いとおもしろきをみすの内へさし入て此
哥をよみて御手をいさゝかひきうこか
したりこの心をえてふちはかまと
いふ事あらは

付給ふへ

し（26ウ）

〔絵十〕（27オ）

真木柱（まきはしら）　玉かつらのならひ

此巻をまきはしらと云事は此玉かつら
のひめ君内の内侍のかみかけてひけくろ
の大将の北のかたになり給ふもとのうへい
て給ひしに其ころ十二三になり給ふひ
め君おはしけるか出給ふとて此哥をかき
てはしらのすこしわれたるなかへかう
かひのさきにてをし入給ふなり
いまはとてやとかれぬともなれきつる
まきのはしらよわれをわするな65（27ウ）
とよみ給ひしなりかき給ひし紙の色
ひはた色なり心えへし扨こそまきはし
らとはいひけれひはた色のかみまきはし
らなとつくへしひとりといふ事此
巻の名句なり玉かつらへ此ひけくろか
よひしにもとの北のかたはけんしのおと
とのなへてならすおもひたてまつり
給ふむらさきの上には別腹の御あね式
部卿の宮の大ひめ君にて世のおほえ
おもりかにあなとりにくき御事にて（28オ）
御子ともゝあまたおはしけれは大将もな
へてならすおもひなから物のけにわ
つらひ給ひて常は御心うつゝなくおはし
けるほとになにとなくさやうの御かたよ
り御中もあかるゝやうなるに此玉か
つらにかよひそめては又おとこの御心い
かならんうつろひはてゝやすき御心もなし
北のかたいとのとやかにてわか御身のほと
心えはてさせ給ひて諸共に出したてな
むとしてやり給ひしかれいの物のけの（28ウ）
わさにや大さ（きカ）なるひとりにひをとりて
にほひして出なんとほのめき給ふなり
さらぬやうにておき出てひとりをなけ
させ給ふ程にはいもたち御そもやけこ
かれなんとせしなりそれよりいとう
とましくなりもてゆきてつゐに
かくもはなれ給ふ此ことは

火とりのはい　物のけ

うとむ

なといふ事付へし此は冬なり又此大将をひ（29オ）

けくろといふは異名なり御ひけのくろ
くおはしまして見さまけんしなとの
ことくにはうつくしくはあらさりけめと
をしなへてはあらすおたしくよのした
かたにてめやすきそかし後には関白に
て内侍のかみ北のまんところかけていみ
しくさかへ給ひし御ことなり扨かし
はきのゑもんのかみいまたとうの中将
と聞えしころ此玉かつらの内侍をわか
いもうとゝもしらすして心をかけ聞え（29ウ）
て御哥に
おもふとも君はしらしなわきかへり
いはもる水のいろし見えねは66
とよみたてまつりしなり此ゑもんのかみ
をは扨こそいはもる中将ともいひしか
さやうのこと人いふともあらかふへからすかし
は木と玉かつらはおとゝひにておはし
ましゝをしらていひ
わたりし
なり（30オ）

〔絵十一〕（30ウ）

十八　梅枝（うめかえ）

此巻むめかえと云事正月晦日のころ源
氏のおとゝの六てうの院にてたき物あ
はせありしこれはあかしの腹の御むすめ
とうくうにまいり給ふ御いそきなり
香ともを御方々へくはりていとみあ
はせ給ふせんさいゐんと申はかのあさか
ほのさいゐん源氏に心つよくてやみ
給ひし人なり此御かたよりちりすき
たる梅かえにふみつけてこんるりの（31オ）
つほにたき物入て五葉のえたに付白
きつほにもたきものいれて梅を折
てむすひ付たるいとのさまなよひかに
えならすおもしろくしなされたるに
その哥
花のかはちりにしえたにとまらねと
うつらん袖にあさくしまめや67
とありしなりたき物と云事には五葉
につけし文なといふへしちりすきた
る梅のえたなよひかなるいとるりの（31ウ）
つほなとあるへしやかて其夜かの
ほたる兵部卿の宮いとくるしきは
むさしありて侍るかなといとけふたし
やとなやみ給ふおなしはうこそはいつ
くにもちりつゝひろこるへかめるを人の
御心〳〵にあはせ給へるにいとけう

ある事おほかりさらになにともなき
中にあさかほのさいゐんくろはうさ
いへと心にくゝしほやかなるにほひ
ことなり侍従はおとゝの御すくれてな(32オ)
まめかしうなつかしきかなりとさた
め給ふたいのうへのはみくさあるなかに
はい花はなやかにいまめかしうすこし
はやき心しらひをそへてめつらしきか
ほりくはゝれるこの比のかせにたくへん
にはさらにこれにまさるにほひあらし
とめて給ふなつの御かたには人々のかう
心〳〵にいとみ給ふなる中にかす〳〵
にも立出すやとけふりをさへおもひき
え給へる御心にてたゝかえうをひと(32ウ)
くさあはせ給へりさまかはりしめやかな
るかしてあはれにつかし冬の御かた
にもとき〳〵によれるにほひのさたま
れるにけたれんもあやなしとおほし
てくろゐかうのすくれたるはさき
の朱雀院のうつさせ給ひてきんたゝのあ
そんのことにえらひつかうまつれりし
百ふのはうなとよそへてよにすな
まめかしきをとりあつめたる心をきて
すくれたりといつれをもむとく(33オ)
ならすさため給ふを心きたなきはん
さなめりと聞え給ふほたる兵部卿の宮
をはんさにて御かた〳〵のたき物を心
みさせ給ふはい花はむらさきのうへあは
せ給ふくろはうをあさかほの斎院あ
はせ給ふかえう花ちるさとあかしの
上はくろゐかうのはうしゝう源氏あは
せ給ふいつれもとり〳〵におもしろし
なかにもはいくはは其ころの折に
あひおもしろしとさためられき御みき(33ウ)
なとまいりて宮かへりたまふ御をく
り物にたき物をたてまつり給へは
宮の御哥に
花のかをえならぬ袖にうつしもて
ことあやまりといもやとかめん68
とあれはいとくんしたるやとわらひ
給ふ御車かくるゝ程にをゐてけんし
めつらしとふるさと人もまちそみん
花のにしきをきてかへるきみ69
とよめり梅ににほふと云事此哥の(34オ)
心なとをとりあはせ付へし又たき物
にもゝあゆみと云事あらはなにそと
おもふへからす是はとをくまて匂ふ心な
りたき物の名にてはあらす又たき物
をあはせては夏冬にかはりてうつむ
事ありそれもにほひにしたかひて

わかつわたりとのゝしたより出る水に
うつむ内裏の御溝水になそらへてなと
いふ事も有へしくはしくはむめかえ
の巻にあるへし（34ウ）

〔絵十二〕（35オ）

十九　藤（ふち）の裏葉（うらは）

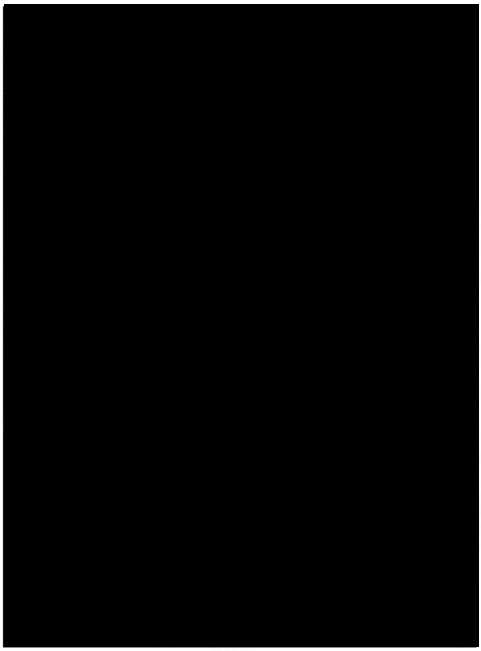
此巻藤のうらはといふ事雲井のかりの
ひめきみを夕きりの大将みとりの袖の
むかしよりおもひそめて年をふるに
ひめ君のちゝおとゝゆるし給はさりしか
さてしもあるへきならねはゆるし給はん
の御心にておとゝの御庭に藤の花のさ
かりに中将をよひ聞え給ふ御あそひな
とはかりにてさかつきのつゐてに
おとゝ藤のうらはのうちすさひ給へるな（35ウ）
り此哥に本哥あり
　はる日さす藤のうらはのうちとけて
　君しおもはゝわれもたのまん㊀
おもひ給はゝむこに取なんといふ心なり
おとゝ
　むらさきにかことはかけんふちの花
　まつよりすきてうれたけれとも㊁
ゆふきり
　いく返り露けきはるをすくしきて
　花のひもとくおりにあふらん㊂（36オ）
相違なくむこに取て水もるましく
めてたかりし後に三条のうへとは此雲ゐ
のかりの御事なりあまたの御子たち出
き給ふ此は四月也さてやかておなし月
にあかしの御はらのひめ君とうくうに
まいり給ふ御つほねはむかしの桐つほな
り御とし十二むかしのかうゐの御つほね
なれは源氏の御さうそくなりしけいしや
と申き御おほえいかてかをろかならん
あまたの宮たちの御母一のみやはとう（36ウ）
くうに立給ふあかしの中くうとはこの
御事なりかくて其年源氏のおとゝ三
十九にて太上天皇のせんしかうふりて
六条院と申き位をきはめ給ふとても
有ましき御事ならねともたゝ人に
なり給ひて後なれはさしあたりては
めつらかにめてたしやかて其秋六条
院へみゆきをなしたてまつり給ふ
御子の夕きりそのころさいしやうなり
しを中納言になさるいつくまても藤（37オ）
のうらはの巻は源氏の御心ゆきよろこひ
し給ふ巻なり心えへし又行幸のおり

おもしろかりしはそのころのゐんと申は
御あにの朱雀院にておはします主上
は人こそしらね六てうのゐんの御子れ
いせんゐんにておはします御さを両
はんにてあるへきを六てうのゐんなをひ
けして太政大臣の御さにせられたり
朱雀院御らんしていかゝとてあるしの
御さをなをさせ給ひ院の御さにひとし（37ウ）
くさせられ
たるやうの
ことを
れうけん
して
付させ
給へ（38オ）

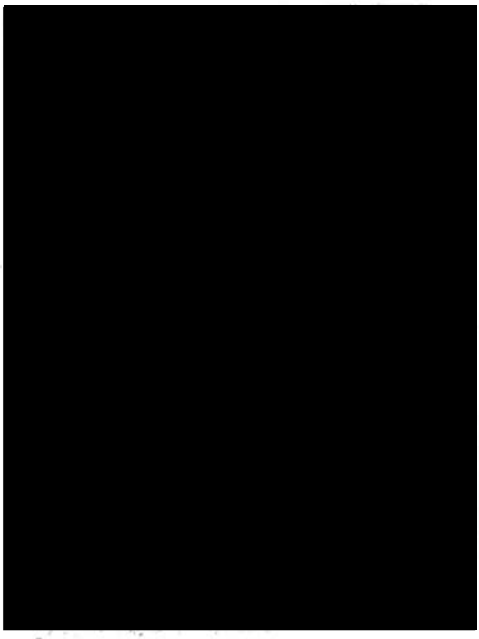
〔絵十三〕（38ウ）

付記

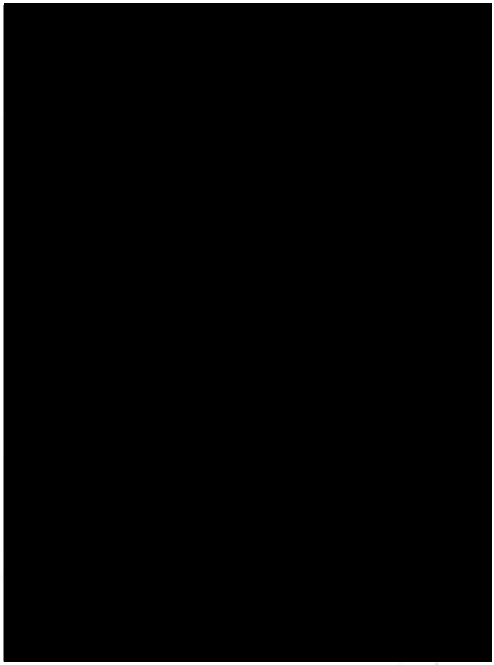
本稿は、平成19～21年度科学研究費補助金（一九五二〇一六三）による研究成果の一部である。



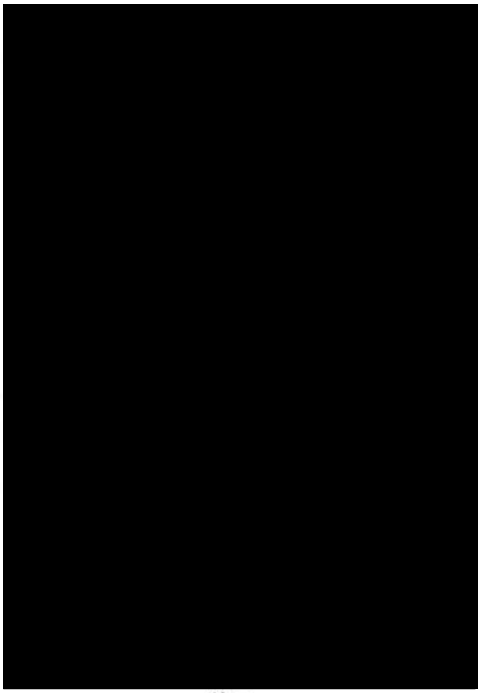
絵二



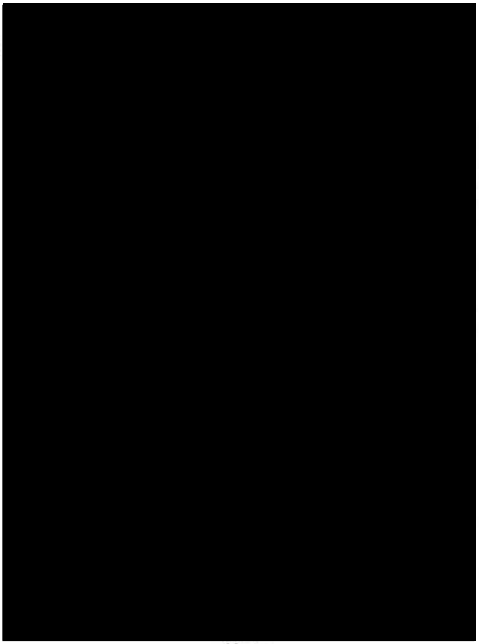
絵一



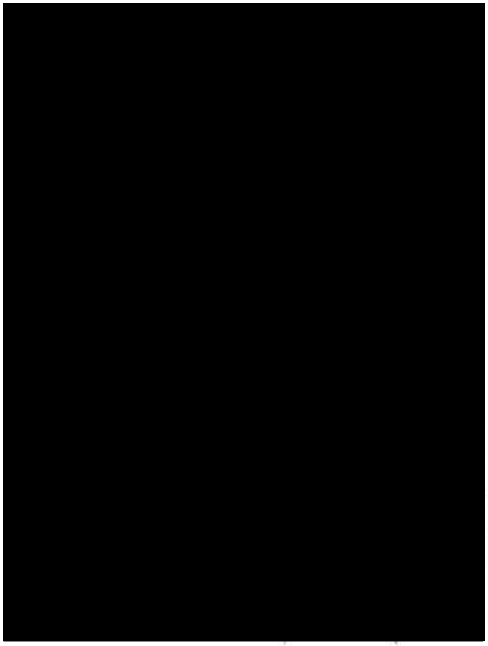
絵四



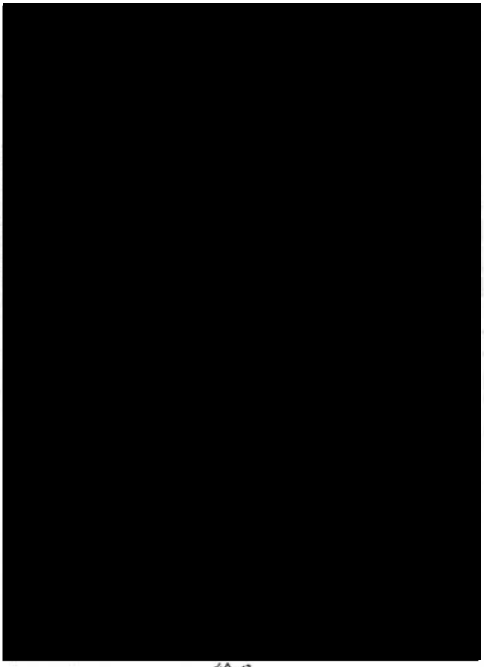
絵三



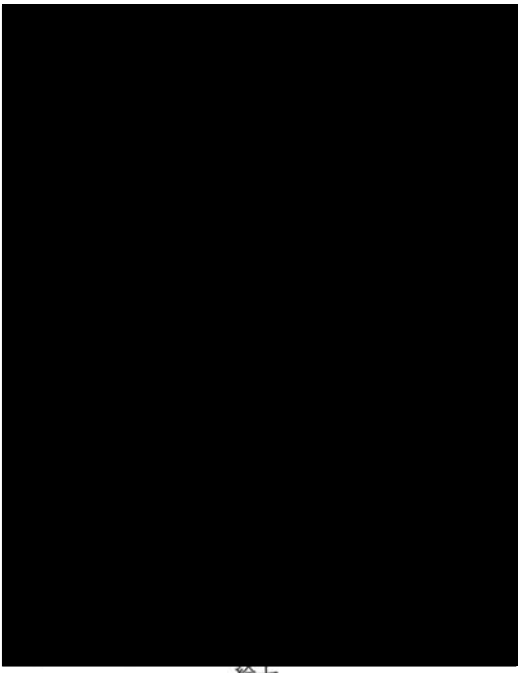
絵六



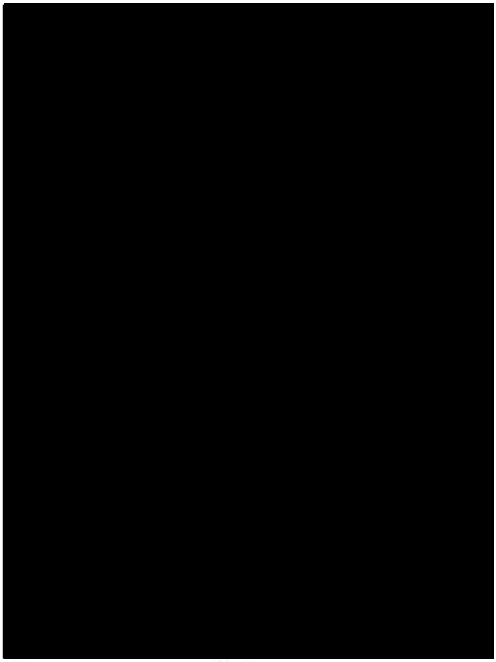
絵五



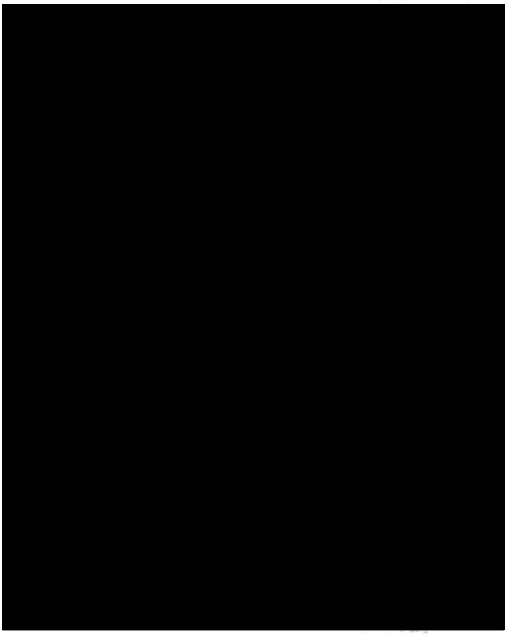
絵八



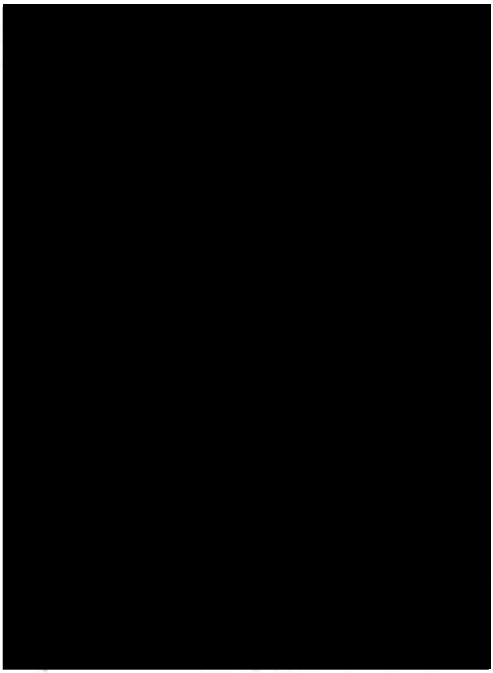
絵七



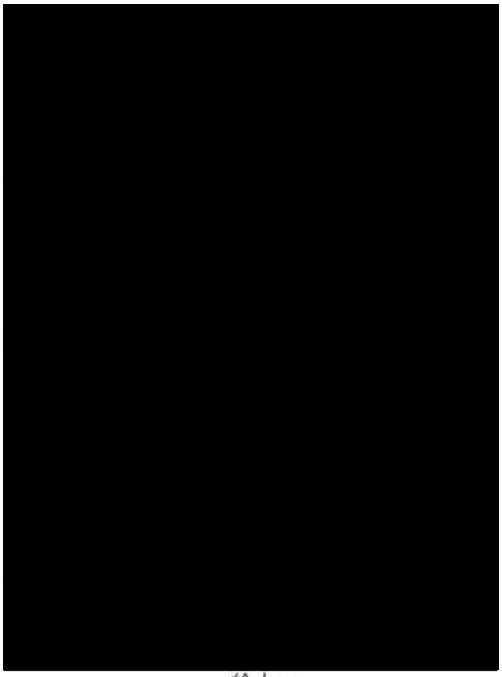
絵十



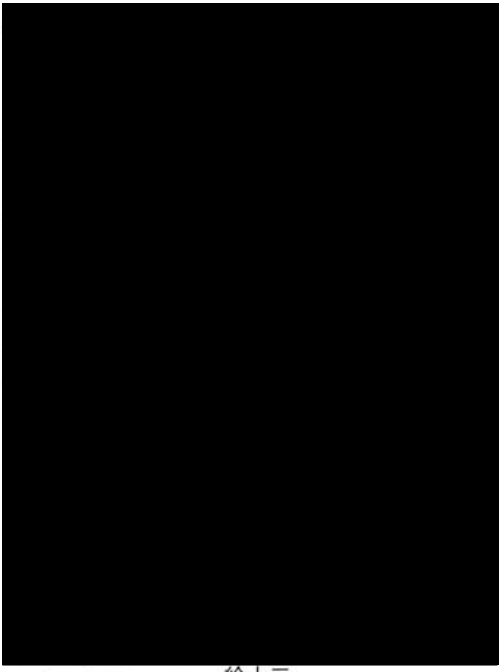
絵九



絵十二



絵十一



絵十三